

2023年度国際版画美術館事業報告書【展覧会版】

展覧会名	自然という書物—15～19世紀のナチュラルヒストリー&アート—		担当者名	藤村拓也			
会期	2023年3月18日(土)～5月21日(日)		開催日数	56日			
協賛・後援・協力	なし						
巡回館	なし						
展覧会概要	15世紀から19世紀までの西洋のナチュラルヒストリー(自然誌)とアート(美術)のつながりに注目し、人間が表してきた自然のすがた・かたち(画像)を紹介した展覧会。古くから人間は動物や植物をはじめ、肉眼では捉えることができない生物、さらには地球上の地勢などを記録してきた。本展では、記録された自然の普及に活字や版画などの印刷技術が大きな役割を果たしてきたことに加え、自然が美術の靈感源となってきたこと、美術の表現手法が自然の図解に用いられてきたことにも注目。ナチュラルヒストリーとアートのつながりによって、西洋の紙上に築かれてきたさまざまな自然のすがた・かたちを、版画や書籍などをつづじて展覧した。						
ねらい・対象	博物画を中心とした版画によるイラストレーション(図解)の歴史をたどることで、自然がどのように記述・描写されてきたかを概観できる構成とした。また想像上の動植物をはじめ、顕微鏡の世界から極地までの自然のあらゆるすがた・かたちを紹介することで、自然がどのように見られ、考えられてきたのかも明らかにすることを狙った。 さまざまな動植物を対象とした博物画や書籍の挿絵を展示することで、版画を中心とした美術の愛好者だけでなく、自然や書物に関心のある観覧者を対象とした。さまざまな版画の技法によって紙面に再現された自然物や自然の形態を活かした装飾意匠などが、アートやデザインの制作現場で活動する観覧者の参考になることも想定しつつ展覧会の準備を進めた。						
関連催事	催事名	開催日	タイトル	講師等	参加者数		
	記念講演会①	4月15日(土)	イギリスと自然 —書物、室内から庭へ、そして田園都市へ—	菅靖子	39人		
	記念講演会②	5月21日(土)	科学とアートの悩ましき葛藤 華麗なるルネサンス博物図譜の世界	桑木野幸司	90人		
	スペシャルトーク	4月1日(土)	BHチャンネル×版美 YouTube生配信!!	ヒロ・ヒライ 橋本麻里 山本貴光 担当学芸員	3070人 ※8/31時点の 視聴者数		
	子ども講座 —みてみてつくろう—	3月25日(土)	自然の絵本をつくる	杉浦幸子 上村牧子(普及係学芸員)	27人		
	ポップアップストア	5月3日(水・祝)～ 5月5日(金・祝)	dubhe(古版画・博物絵はがき) 古書ドリス(古本) うみねこ博物館(昆虫標本・博物雑貨)	—	670人 ※来店者数		
	プロムナードコンサート	4月29日(土)	音を楽しむ 自然と楽しむ	Duo Iris (真野種子:バイオリン) (後藤加奈:ピアノ)	185人		
	ギャラリートーク	4月8日(土) 5月6日(土)	担当学芸員によるスライドトーク	担当学芸員	39人 51人		
観覧料	一般	大・高生	中学生以下	無料日			
	900 円	450 円	無料	・初日:3/18 ・開館記念日4/19 ・シルバーデー(65歳以上無料):3/22、4/26			
観覧者数	有料計	無料計	総観覧者数	内、一般	内、大・高生	内、小・中生	内、その他
	7,855 人	2,507 人	10,362 人	9,178 人	894 人	290 人	0 人
	目標値	9,337 人					
主な収入	観覧料収入	図録販売収入	受託販売収入	その他の特定財源			
	5,714 千円	1,903 千円	880 千円	—			
事業経費	・講師謝礼	45 千円					
	・原稿執筆謝礼	225 千円					
	・展覧会協力謝礼	285 千円					
	・展覧会出陳謝礼	50 千円					
	・通信運搬費	3,730 千円	10,500 千円				
	・作品額装委託料	1,019 千円					
	・広告宣伝委託料	473 千円					
	・ミュージアムグッズ作成委託	220 千円					
	・ポスター等作成委託料	3,430 千円					
	・ディスプレイ作成委託料	1,023 千円					

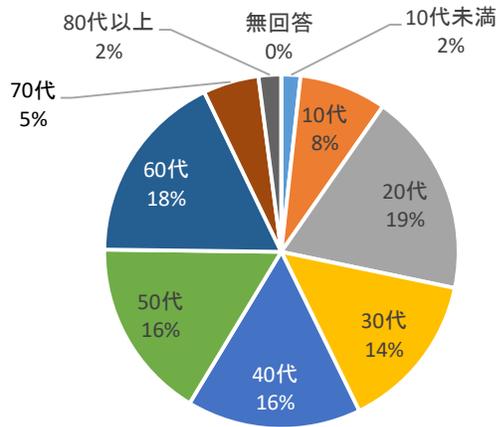
主な広報・取材等の講評	【TV放送】日曜美術館(アートシーン) 【新聞】読売新聞、東京新聞、朝日新聞、日本経済新聞、産経新聞、共同通信配信記事、都政新報ほか 【雑誌】美術の窓、an'an、Ozmagazine、Hail Mary Magazine、月刊ギャラリー、BRAIN、週刊文春、CONFORTほか 【ウェブ】Sfumart、rakukatsu、artscapleほか						
アンケート結果	回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)		
	706 件	6.8 %	16 %	44 %	企画の内容	展示作品	展示の仕方等
	706 件	6.8 %	16 %	44 %	97 %	97 %	83 %
	主なご意見	別紙のとおり。					
工夫と反省点、改善方法	予備調査	2022年1月頃から文献調査を中心に展覧会の骨格を整え、また大まかな業務スケジュールを計画したのち、同年6月から美術館や大学図書館などでの作品調査を開始した。同時にイベント関係者への連絡と打ち合わせを適宜おこなっていた。展示構成の変更や追加の作品調査などによって、多少の遅れが出た作業もあったが、スケジュールに余裕をもって進めることができた。また当館所蔵の作品に関しては、2017年度に開催した「紙の上のいきものたち！！」展の内容や、当館紀要の第24号掲載「「デューラー風の犬」についての覚書」の研究成果を反映させた。					
	作品選択	当館の収蔵品約100点にくわえ、美術館や大学図書館14箇所から約140点を借用し、約240点による全4章の構成とした。第1章「想像と現実のあわい」と第2章「もっと近くで、さらに遠くへ」、そして第3章「世界を分け、腑分け、分け入る」では、編年によって出品作を展示。自然がどのように記述・描写されてきたか、どのように見られ、考えられてきたかを、歴史をおって概観できる内容とした。最終章の第4章「デザイン、ピクチャレスク、ファンタジー」では、博物誌と美術の混交ともいうべき作品を紹介した。版画技法によってリアルに再現された自然だけでなく、人間の想像力が生み出した作品も併置することで、学術性と遊戯性の両方を堪能できる内容を目指した。					
	図録作成	予算額と今までの発行部数を鑑み、1,200部印刷した。桑木野幸司氏(大阪大学教授)と菅靖子氏(津田塾大学教授)に巻頭論文の執筆を依頼し、担当学芸員と当館学芸員2名の計3名による論考も収録した。カラーページには全出品作を掲載し、第1章から第3章までの作品掲載ページに解説を、巻末に作品リストと参考文献リストを付した。販売価格を手に取りやすい2,000円(税込)に設定したことにくわえ、関連イベントでの宣伝やSNSでの口コミなどの影響もあり、売れ行きは好調であった。販売分の950部が会期半ばの4月30日に完売し、増刷を望む声がSNSやアンケートに寄せられた。					
	広報	委託業者によるプレスリリースの発信、広報まちだへの掲載、当館当館Twitter、Instagramでの告知を行った。展覧会開始の2ヶ月前にプレスリリースを発信したこと、担当学芸員の解説によるプレス向けの内覧会を開催したことで、ウェブと紙面ともに掲載が増えたと考えられる。またSNSを活用して、展覧会内容や関連イベントを積極的に行ったことが、観覧者や参加者の増員につながったと考えられる。なおポスターとチラシを印象深いものとするために、「自然という書物」という展覧会名にちなんで帯付きの書籍の表紙を想起させるデザインとした。					
	宣伝	駅貼り広告やSNS広告は実施せずに、ライブ配信番組「ニコニコ美術館」の収録を委託した。橋本麻里氏の進行のもと、担当学芸員が会場を巡りながら解説を行った。ライブ配信後も会期中は視聴することができたため、後述する関連イベントのYouTube配信と同じく、宣伝効果にくわえて展覧会の内容を予習・復習できる教育効果もあったと考えられる。また来館しにくい遠隔地の美術愛好者に当館の存在を知ってもらう機会にもなり、長期的な宣伝効果も期待される。なおニコニコ美術館の視聴数は、公開終了までに14,000をこえた。					
	ディスプレイ	書籍が出品作の大半を占める本展の場合、展示用のケースが乱立してしまい、動線が複雑になってしまったり、圧迫感のある展示空間になってしまったりする問題があった。鑑賞中のストレスが大きいと満足度に影響するため、壁内の展示空間を活用することで上述の問題の解消を狙った。また休憩用の椅子を多めに設置した。ただし200点を超える出品数であったため、順路がわかりづらい場所ができてしまった。ガラスやアクリルの保護面と書籍との間が離れてしまい、見にくいとの声も寄せられた。					
	輸送・展示撤去	借用先が多かったため、早めのスケジュール調整を行い、借用・返却ともに円滑に進めることができた。出品点数が多いことや書籍を展示するための台を作成する必要があることから、展示作業は5日間をかけて行った。事前準備や展示計画も入念に行ったが、想像以上に書籍の展示に時間がかかってしまった。作業人数をもう少し増やす必要があった。一方、展示替えと撤去は円滑に行うことができた。					
イベント	イベント数と関係者数が多いことから、早めの連絡や交渉を心がけた。また展覧会とイベントの内容をうまくつなげることで、来館者の増加を狙った。たとえばポップアップストアでは自然に関するグッズを扱う業者に依頼することで、自然愛好者にも足を運んでもらうことを企図した。また展覧会の内容をクイズ形式で紹介したYouTube配信では、出演者の既存のファンに本展に興味をもってもらうことを期待した。イベント関係者によるSNS上での宣伝もあって、いずれのイベントも多くの参加者が訪れた。						
その他特記事項	NHKで4月1日に放送された日曜美術館のアートシーンで本展が紹介された。くわえて上述の広報・宣伝やイベント関係者・参加者によるSNSでの口コミの相乗効果もあり、本展の観覧者数は目標値をこえる約10,000人となった。図録の完売にもSNS上の広報・宣伝や口コミが大きく影響したと考えられる。またニコニコ美術館やYouTubeでの動画配信によって、今まで当館を知らなかった層にも展覧会の情報が届いたことも、観覧者数の増加につながったと考えられる。						
館長からの指導点							
運営協議会での検証							

「自然という書物—15～19世紀のナチュラルヒストリー&アート—」展 アンケート集計結果

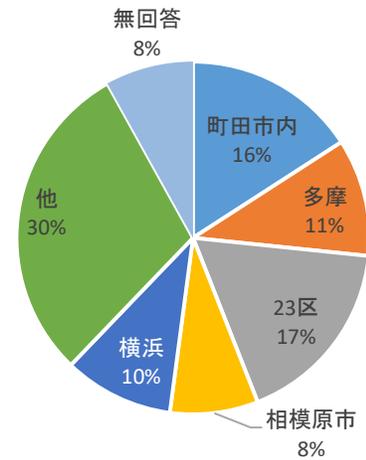
開催期間：2023年3月18日（土）～5月21日（日）

回答者数：706人（総入館者数：10,362人 アンケート回収率：6.8%）

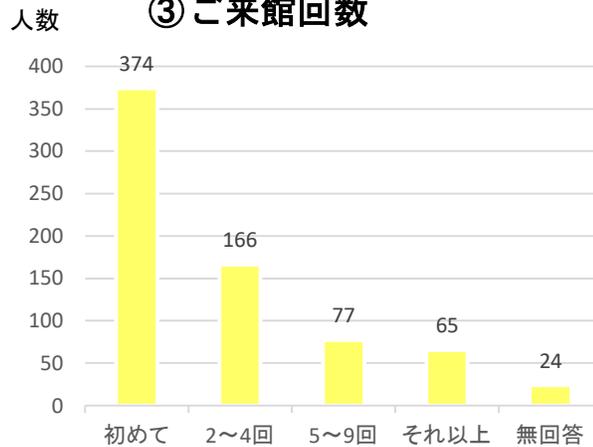
① 年齢層



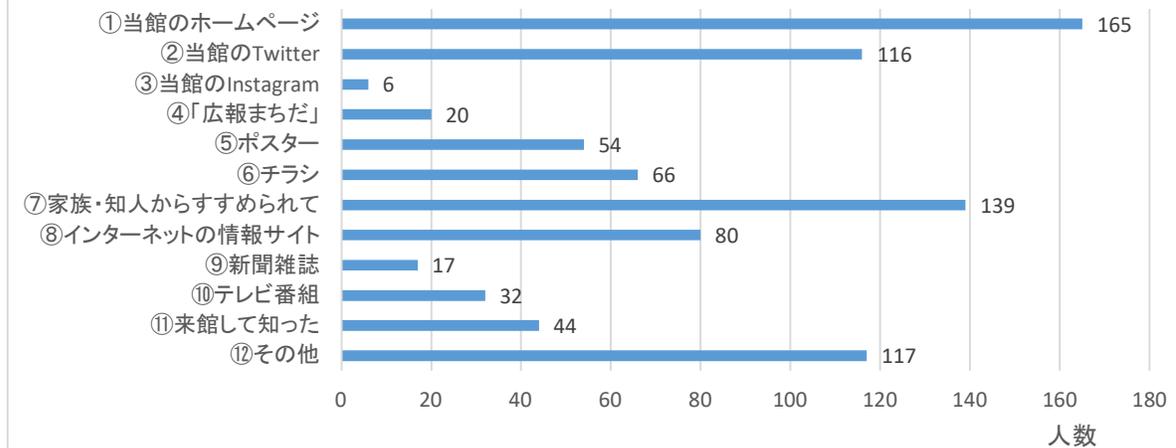
② お住まい



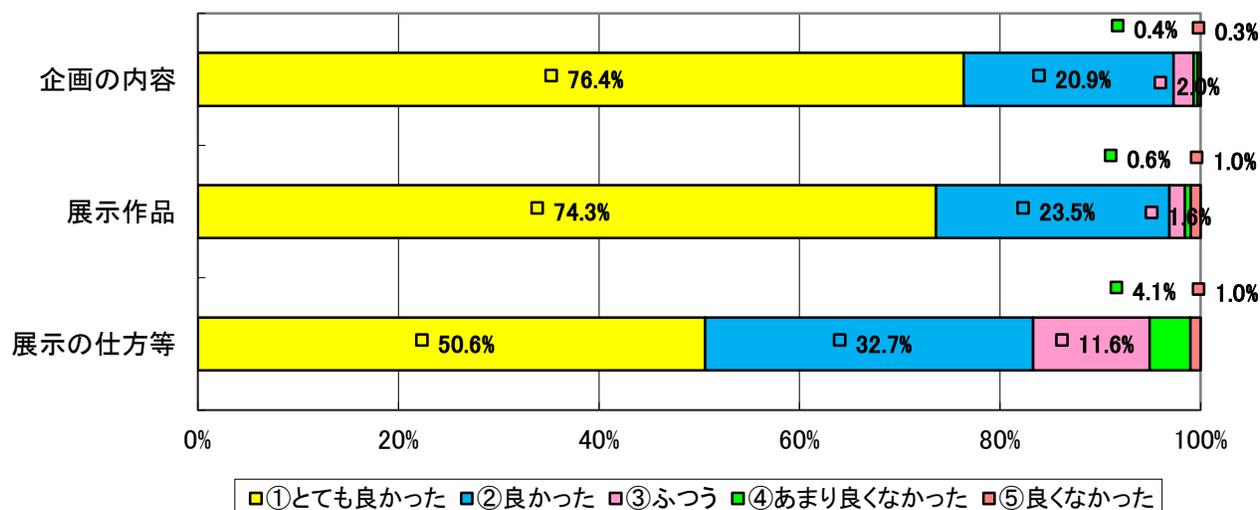
③ ご来館回数



展覧会情報の入手



⑥ 回答者の満足度



⑦ 主なご意見・感想

【企画の内容】

- ・展覧会の主旨が分かりやすかった。・稀覯本を見ることができる素晴らしい体験だった。
- ・キャプションが丁寧だった。解説文がよかった。・作品の選択・展示の量ともに良かった。
- ・作品・キャプション・全体のストーリーなど無駄も不足もなく満足できた。

【展示の仕方等】

- ・動線が分かりやすかった。・足元の矢印シールが分かりやすかった。
- ・書物の展示ページの対訳を添えてほしかった。・展示されたページ以外も見なかった。
- ・壁面ガラスの中がよく見えなかった。・暗すぎて細かいところが見えなかった。照明の映りこみが気になった。
- ・動線が分かりにくかった。・解説文が分かりにくかった。文字が小さくて見にくかった。
- ・撮影可能な作品があっといううれしかった。・カメラのシャッター音が気になった。

【その他】

- ・チラシやチケットなどの印刷物のデザインが素敵だった。・ファッション割引がうれしかった。
- ・シャトルバスを増やしてほしい。・売り切れた図録を増刷してほしい。

本展の総観覧者数は10,362人で、目標値の9,337人を超えた。20代から60代まで幅広い世代が観覧し、遠方からの来館も少なくなかった。初めて当館を訪れた人数も多く、YouTubeやニコニコ美術館での動画配信が影響したと考えられる。これらの動画だけでなく、SNSでの発信や口コミを見て来館したとの回答も多かった。

観覧者の満足度も非常に高く、展覧会の内容にかんしては肯定的な意見が多かった。ただし、出品点数が多かったために動線が複雑になってしまったことや、展示ケース内の作品が見にくかったことなどから、展示の仕方については否定的な意見が寄せられた。また今回は展示室での撮影を一部の作品に限定して許可したが、それでもシャッター音や撮影マナーについての苦情が少なくなかった。感想としては、本展のねらいであった西洋の自然観の変遷や自然科学と美術のつながりを面白く理解できたとの声が多かった。自然物をあしらった服飾品を身に着けて来館すると観覧料が安くなるファッション割引や関連イベントも好評だった。